

Title	日中対照の観点からの精神概念を表す身体部位の認知モデルについての一考察：「はら」「きも」を中心に
Author(s)	劉, 婉儀
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2024, 2023, p. 107-118
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97347
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日中対照の観点からの精神概念を表す身体部位の認知モデルについての一考察 — 「はら」「きも」を中心に —

劉 婉儀

1. はじめに

日本語では内臓を表す身体部位詞「腹」と「きも」は「心」と並んで精神作用を表す慣用表現が多い (e.g. 腹が黒い/きもが太い)。「腹」も日本人の「心の座」として最も基本的で重要な身体部位であると考えられる (後藤, 2016: 45)。これらの語は「心」に関わる意味が備わっており、「きも」と「腹」の間に互換性も見られる (e.g. 肝/腹を据える)。中国語でも慣用表現において「心」という精神概念を表すには、「心臓」のほか、「腹」「肝」「胆」といった内臓を表す身体部位詞が用いられている (e.g. 口蜜腹剣/肝胆相照)。それらが、「心臓」と合わせて用いられる場合も多く見られる (e.g. 心腹之患/心肝肉)。「はら」と「きも」の意味については、日中両言語には多くの共通点が観察される¹。

- (1) 「はら」: ①胃腸などの内臓をおさめている体の部分。また、胃腸。②(胎とも書く)母の胎内。また、そこから生まれた人。③ア) ころ。本心。考え。イ) 度胸。胆力。
④物の中央部の広くてふくらんだ部分。

「腹 (FU)」: ①胃腸などの内臓をおさめている体の部分。②ころ。③物事の中央部分または内部。④物のまるくてふくらんだ部分。

- (2) 「きも」: ①内臓の主要部分。ア) 肝臓。イ) 内臓の総称。はらわた。②ア) 心。精神。気力。イ) 考慮。③物事の重要な点。急所。

「肝 (GAN)」: ①肝臓。②ころ。

「胆 (DAN)」: ①胆嚢。②きもったま。度胸。③容器の中にある球形のもの。

(『日本国語大辞典』(第二版)と『現代漢語辞典』(第七版)より)

一方、日本語では、「はら」に「腹」「肚」「胎」「胆」といった表記があり、外的な身体部位を指すのみならず、内臓を指すこともあるので、「はら」という語の指示対象が多岐にわたるのに対し、中国語では「腹」「肝」「胆」といった語の指示対象が明示的であるという相違点も観察される。また、日本語では「きも」と「腹」の互換性が見られる (e.g. 肝/腹を据える) のに対し、中国語ではそれがあまり見られないことが問題となっている。このような日中語の相違点からみると、「はら」と「きも」に対する認知の相違が反映されていると考えられる。この点について先行研究は十分に論じられていなかった。

今までの研究では、後藤 (2016, 2019)、Yu (2003) のように、認知言語学の観点から日中語の「はら」「きも」に関する慣用表現の意味分析を行う研究が行われてきたが、日中対照の観点から研究されるものは多くなく、これらの身体部位の認知モデルの異同を詳しく検討しているものも少ない。

本稿は後藤 (2016) の考察に啓発され、日本語と中国語において、精神作用を表す身体部位(腹、肝・胆)を用いた慣用表現を検討する。そしてこれらの身体部位と精神作用との接点をめぐってそれらの身体部位の認知モデル²をそれぞれ考察し、日中の身体に対する理解の共通点と相違点を明らかにすることを試みる。

本稿の構成は次の通りである。まず2節では先行研究と研究課題をまとめ、3節で調査方法を示し、それぞれの言語における各身体部位の慣用表現の意味分析を行い、4節で対照考察する。最後に5節で今後の課題を提示する。

¹ 中国語では「腹 (FU)」と意味がほぼ一致している語「肚 (DU)」があり、「腹」の俗称であり、「胃腸」を指すことがある。また、「肚子」という語も同じ意味で、話し言葉でよく使われている。日本語では「胆」という漢字は音読みで「たん」と呼ばれる場合が多い (e.g. 落胆、大胆)。中国語からの影響を受けていたと想定でき、「心胆を寒からしむ」「胆気」といった慣用表現で少なからず使われている。

² Lakoff (1987) によると、理想化認知モデル (Idealized cognitive model) はある言語・集団が共有する慣習や価値観が理想化された概念モデルとされている。私たちは世界について理想化された知識の総体に基づいて言葉の意味を理解していると考えられている (後藤, 2016: 45)。本稿では、身体基盤や文化基盤から形成された身体部位に対する理解の総体を身体部位の「認知モデル」とする。

2. 先行研究の概要とリサーチクエスチョン

現代日本語では「腹」には身体部位を表す物理的な意味と、「心」を表す精神的意味がある。過去の先行研究で「腹」には以下(3)のような精神作用が結びつくことが明らかにされている(後藤, 2019: 24)。

- (3) 腹が立つ(怒り)、腹が黒い(性分)、腹が太い(度胸)、腹が脹れる(不満)、腹を抱える(可笑しさ)、腹を探る(考え・意図)、腹を決める(決心・覚悟)、腹に落ちる(理解・納得)

こうした「腹」の特徴に関して研究されているものが多くみられる。「腹/肝を据える」、「腹/腸が振れる」のように、「腹」と「肝」や「腸」との互換性が見られることから、「腹」に関する理解が内臓の理解と重なり合うと考えられる(後藤, 2016: 45)。こうした観点に立ち、後藤(2016)は「腹」を基本的な単位で分析することが妥当であると考え、日本語の「はらわた」「きも」「はら」「ふ」という4語をまとめて〈腹〉と表記し、それぞれの語を用いた慣用句を分析した。

具体的には、〈心は腹である〉〈心を収める容器は腹である〉という2つの概念メタファーに分類し、それぞれの下位メタファー(e.g. 〈心の安定・不安定は腹の安定・不安定〉、〈本音は腹の内容物〉)を分析し、「腹」や「肝」の認知モデルを考察した。

一方、中国語では、身体部位の概念化の過程に中国伝統医学や文化的な考えが影響していると考えられており、身体部位に対する理解に文化的メタファーが反映されると想定される(Yu, 2003, 2008)。中国伝統医学において、「腹」や「肝」などの五臓六腑の働きは単に身体的な作用だけではなく、精神的な作用にも関わる概念として捉えられている。Yu(2003)は中国語の「胆」の表現を検討することで、「胆」に対するメタファー的な理解を哲学や中国伝統医学の観点から考察し、文化的背景や哲学的な考え方が身体部位の認知に影響を与えていることを示した。

具体的に、中国人の「胆」に対する理解は〈胆は勇気を収める容器である(GALLBLADDER IS CONTAINER OF COURAGE)〉、〈勇気は胆にある気である(COURAGE IS QI (GASEOUS VITAL ENERGY) IN GALLBLADDER)〉という2つの概念メタファーに支えられている。また、中国語の「胆」は「勇気」を象徴する身体部位として捉えられており、「胆」表現が容器のメタファー(「気」の考えを支えとする)に基づいている(e.g. 大胆、胆量、胆虚など)と指摘している。

1節で述べたように、中国語の「肝・胆」と「腹」の互換性が見られないことを考察していないこと、日中対照の観点から「腹」「きも」の認知モデルを検討するものが少ないといった先行研究の不足点があげられる。そこで、本稿の目的は、日中対照の観点から「はら」と「きも」の概念化における日中語の共通点と相違点を明らかにすることである。「はら」「きも」を含めた慣用表現の意味分析を通じてそれぞれの認知モデルを考察することで、以下の3点を明らかにする。

- ①日本語では、「腹」、「きも」がどのように捉えられているか
- ②中国語では、「腹」、「肝」、「胆」がどのように捉えられているか
- ③以上の2点を比較して日中語の身体部位・器官に対する理解の共通点と相違点は何か

3. 分析

3.1 調査方法

本研究は日本語の「腹(はら)」、「きも」を含む慣用表現、中国語の「腹」、「肚」、「肝」、「胆」を含む慣用表現を考察対象とする。中国語では、「肚」が「腹」の俗称で、同じような意味を表しているため考察対象に入れた。具体的には、『日本国語大辞典(第二版)』、BCCWJ(現代日本語書き言葉均衡コーパス)、『中国成語大辞典』、『中日大辞典(第二版)』に記載された「腹・肚」「肝」「胆」の語で構成された慣用表現のうち、精神と関わる意味をもつ表現を抽出する³。Lakoff & Johnson(1980)、Lakoff(1987)による概念メタファー理論の枠組み、Goossens(1995)による

³ 「腹を切る」、「腹が膨れる」のような慣用句には2つ以上の意味があるが、その中、精神作用と関わる意味があれば考察対象とする。「腹が減る」「私腹を肥やす」のような食欲や金銭に関するものを対象外とする。また、「きもが煎れる」、「きもが切れる」のような、現代であまり使われていない慣用表現も対象外とする。中国語では、同じ意味を表すが、形が固まっていない慣用表現がある(e.g. 肚里撐船/宰相肚里能撐船)ので、その中、使用頻度が高いもの(宰相肚里能撐船)を選んで一つの慣用表現として数える。こうした基準で収集して絞り込んだ慣用表現の総数については、日本語の場合、「腹(はら)」は22例、「きも」は14例、合計36例。中国語の場合、「腹」と「肚」あわせて27例、「肝」と「胆」あわせて26例、合計53例。便宜上、中国語の使用例の字体を繁体字に統一する(ただし、「胆」を「膽」ではなく「胆」のままにする)。

「Metaphotonymy (メタフトニミー)」⁴に基づき、「腹・肚」「肝」「胆」を含めた慣用表現の意味分析を行い、対照考察する。

3.2 日本語と中国語の「腹・肚」

本節では、対照的に分析するために、日本語と中国語それぞれの「腹・肚」に関する表現を項目ごとにまとめて観察していく。メタファーに関しては、Kövecses (2000)、後藤 (2016) などの先行研究で指摘されているように、日本語の「腹」には大きく分けて2種類のメタファーが考えられる。「腹が黒い」や「腹が大きい」のように「腹」そのものが「心」を表すメタファーと、「心」を収める容器としての「腹」のメタファーである (e.g. 腹に収める、腹の虫が収まらない)。前者は容器(腹)と内容物(感情や考え)の隣接関係を表すメトニミーであり、後者からの拡張であるという見方 (e.g. 松井, 2007) もあれば、両者をメタファーとして対等に扱っている見方もある (e.g. 後藤, 2016)。本稿では、日本語と中国語の「腹・肚」の慣用表現例をそれぞれ収集して検討したうえで、「腹」の容器としての側面に着目し、〈腹は心を収める容器である〉⁵メタファーを扱って、「心」を「腹」の内容物として分析していくことにする。

まずは「腹・肚」のメトニミー表現について見ていく。日中両言語ともに「腹」のメトニミー表現は限られている。以下(4)と(5)は、いずれも「笑い」を表す表現である。

- (4) 腹の皮が振れる、腹の皮を振る/繕る、腹を抱える、腹を切る
- (5) 笑破肚皮、捧腹大笑

(4) では、「腹を振る/繕る」や「腹を切る」といった「腹」の表現は腹筋の緊張・弛緩から得られた身体経験に基づくメトニミー表現である (後藤, 2016: 46)。(5) では「捧腹大笑 (腹を抱えて笑う)」「笑破肚皮 (腹の皮が破れるほど笑う)」も同じく身体感覚との隣接性に基づくメトニミーであるという点が日中で共通している。また、注意したいのは、これらの表現は文字通りの事態が生じていなくても「笑う」意味が成立するので、メトニミーだけでなく、メタファーとも考えられることである。いわゆる、Goossens(1995)による「メタフトニミー」である。

- (6) 心腹之疾、心腹之患、心腹之人
- (7) 牽腸挂肚 (ひどく心配する)、翻腸攪肚 (非常に不安である)

(6) では、「心腹」が「心臓」と「腹」の複合語であるが、メトニミーによって「急所」と「内部」の意味が生じ、これを前提として「心腹之疾/心腹之患 (心腹の疾患)」はメタファーによって「内部に隠れている禍根」を慣用的に表すことができると考えられる。「心腹之人 (心腹の友→心を許し合った大事な親友)」も同様である。

1節で言及したように「肚」には胃腸を表す意味があり、(7)の「肚」表現は文字通りに精神上的の緊張や不安が原因で胃腸の調子が乱れているという身体経験に基づき、メトニミーによって「他人や事が非常に心配で不安である」を表している。日本語と比べ、中国語の「腹・肚」のメトニミー表現には「笑い」に関するものだけでなく、「心配や不安」の感情を表すものも観察される。

続いて「心」を収める容器としての「腹・肚」のメタファー表現を取り上げて検討する。⁶

3.2.1 〈感情は腹の内容物〉

- (8) 腹が膨れる/張る、腹の虫が収まる/収まらない、腹に収める、腹に据えかねる
- (9) 満腹牢騷、一肚子火、一肚子氣、一肚子苦水

⁴ Goossens(1995)により、メタファーとメトニミーが協働する場合を「Metaphotonymy」と呼ばれる。その中で「メトニミー由来のメタファー」、「メタファー内のメトニミー」といったパターンが提案されている。

⁵ 後藤 (2016) の〈心を収める容器は腹である〉による引用。

⁶ 後藤 (2016) は、「腹」「肝」「腸」「腑」をまとめて〈腹〉と表記して分析し、〈心を収める容器は腹である〉という概念メタファーの下に、〈本音は腹の内容物である〉、〈怒り・不満は腹の内容物である〉、〈理解・記憶は腹に取り込む・染みつけることである〉、〈感動は腹にしみることである〉という4つの下位メタファーを考察した。本稿ではラベルで先行研究を提示しない、または本文で説明しないかぎり、本稿のオリジナルな考察となる。

(8)～(9)では、日中は同様に容器のイメージ・スキーマ⁷を通して不満や怒りの感情を表現している。強烈な感情をできるだけ腹に収めるようにすると、腹が膨れあがり、腹の中の物を収められない事態となる。後藤(2016:49)が指摘したように、日本語では本音としての感情を隠すことに重点が置かれるため、怒りや不満の感情表現が「強大化・抑圧」に関わる語を中心に構成されている。

一方、中国語では、「満腹牢騷(腹の中は愚痴でいっぱい→大いに不満を持っている)」、「一肚子苦水(腹の中は苦い水でいっぱい→苦しみを持っている)」のように、腹の中で内容物が溢れている状態に焦点を当て、不満や苦しみを捉えている。また、「一肚子火/一肚子氣(腹の中に火や気体がたまっている→怒りを収めている)」でも、怒りを捉えるには「内容物が満ちている状態」に関わる表現が中心に使われている。「一肚子火」は腹の体温変化に関わる感情表現なので、純粋なメタファーではなく、人の普遍的な身体感覚に基づくメトニミー的基盤を持つメタファーであると考えられる。ゆえに、メトニミー由来のメタファーである。

総じて、日本語でも中国語でも「怒り・不満」に関する感情を容器としての「腹」の内容物を通して捉えられるのは共通している。中国語の方は「怒り・不満」だけでなく、「苦しみ」も捉えられるメタファー表現がみられる一方、腹の熱変化の感覚に基づいたメトニミー的基盤をもつメタファーも観察される。⁸

3.2.2 〈知識・学問は腹の内容物〉

(10) 肚子裏有墨水、満腹詩書、満腹珠璣、満腹經綸

(10)の「腹・肚」の表現は人が豊富な知識、学問を持つことを意味する。「肚子裏有墨水(腹に墨がある→知識・学問がある)」については、古代中国では「文房四宝(筆、墨、紙、硯)」が書齋で使用される文房具であり、知識人が筆で墨をつけて紙に文章や詩を書くことが一般的であった。例えば、『新唐書(巻二〇一・列伝一二六)』によると⁹、唐の有名な詩人である王勃は文章を書く前に、構想を練らず、大量の墨を飲んで寝て起きてから文章を一気に書き上げたので、当時、腹の中に文章を練り上げたようで随時に取り出すことができると言われていた。転じてメトニミーによって「墨」が「知識や教養」を指すようになり、腹に墨がある人が学問や教養のある人と評価されるようになったと考え得る。それに対し、知識や教養のない人は「胸無点墨(胸(腹)の中に一滴の墨もない→無学無知である)」と見下される。

まとめると、「肚子裏有墨水」は「学識を持つ」という抽象的な意味を表すメタファー表現である一方、メトニミー的基盤も持っているのでメトニミー由来のメタファーでもあると考えられる。

この例以外、「満腹詩書」も、腹の中に詩や書物がたくさんあることから、広い知識・学問を持っている人を評価する慣用表現である。「満腹珠璣(腹の中に珠玉がいっぱい→文章や言葉遣いが美しい)」も同様に、優れた詩文を作った人を評価する言葉である。「珠璣(珠玉)」が美しい宝石を指すが、転じて詩文の内容が宝石のように美しいことから優れた詩文を指すようになる。色々な文章や書籍を読んだことがあるので、構想や優れた文章を作ることが可能になる。そのため、これらの表現は、原因で結果を表すメトニミー表現であると考えられる。このメトニミーを基盤として、知識・学問を持つことを慣用的に表しているのも、純粋なメトニミー表現ではなく、メ

⁷ 認知意味論では、イメージ・スキーマは空間認知や運動感覚など、外界と関わる経験を通して形成される認知図式であり、私たちの物事に対する認知の基盤を成すものの一つである。容器のイメージ・スキーマは日常の経験から得た「容器」の特徴・性質を抽象化したものであり、内部、外部、境界という3つの構造的要素からスキーマを形成すると考えられている。容器のイメージ・スキーマの特徴に関しては、「外」と「内」の境界がある、容器の外から内へ、内から外へ内容物を出し入れするといった点があげられる。

⁸ 日本語でも「腹が煮える/煮え立つ」「はらわたが煮えかえる/煮え繰り返る/燃え返る」という体温変化に伴うメタファー表現がある。1節で中国語の「肚子」は「胃腸」を表すこともできると述べたように、日中語の〈腹〉に関わる表現は腹の部分の温度変化の感覚を通して「激しい怒り」を捉えていることに共通点が見られる。

⁹ 原文は「勃屬文、初不精思、先磨墨數升、則酣飲、引被覆面臥。及寤、援筆成篇、不易一字。時人謂勃為腹稿。」である。(句読点は筆者による。試訳：王勃は文章を書く際に、初めは構想を練らず、墨を磨って飲んでから寝た。起きてから、内容の添削なしで一気に文章を書き上げた。当時、王勃は腹の中に文章を練り上げた(いわゆる、腹稿)と言われていた。)

トニミー由来のメタファー表現であるとも考えられる。

また、「満腹経綸（腹いっぱいを経綸→豊富な経綸）」は豊富な経綸を持つ人を評価する表現である。このメタファー表現をみると、中国語では経世の才を持った人の腹には世の中を治める知識や方策がたくさんあると捉えられている。古くから中国では知識人の社会的な地位が高いため、「肚子裏有墨水」や「満腹詩書」で「腹」に知識や学問がある人を高評価するのに対し、「胸無点墨」「肚子裏没墨水（腹に墨がない）」などの表現を用いて無学無知な人を軽蔑するわけである。

3.2.3 〈本心・考えは腹の内容物〉

- (11) 腹を読む、腹を見抜く、腹を割る、腹を探る、腹のうちを明かす
- (12) 傾腸倒肚、肚裏蛔蟲、推心置腹、打腹稿

日本語では、真実の気持ちとしての本心が宿る場所に関しては「腹」は多く論じられている（e.g. 後藤，2016；田中，2003）。本当の心は容易に他人に打ち明けるものではないため、常に「腹」という容器に収められている。他人の腹を「探る、読む、見抜く」という行為によってはじめて他人の本心や考えがわかってくる。必要に応じて自ら腹を割って腹の内の本心を取り出すこともある。中国語の場合は日本語と似たような捉え方を持っている。例えば、「傾腸倒肚（腸と肚にあるものをすべて取り出す→本音を打ち明ける）」、「推心置腹（自分の真心を人の腹に入れる→誠意をもって人と接する）」も「腹」の容器のメタファーを通して本音を捉えている。また、「考え」を「腹」の内容物に捉える場合もある。現代中国語の「打腹稿（腹案を練る）」は作文や発表をする際に、事前に構想を練って考えておくことを表す表現である。日本語でも「腹案を作る」など、似たような表現が用いられる。日中がこの点で共通している。

一方、日本語「腹の虫」の意味の成り立ちと異なり、中国語では「肚裏蛔蟲（腹の虫→他人の心がわかる人）」は他人の心をよくわかる人を形容する時に使われる表現である。人の腹に生きている虫が腹の中のもの（考え）をよく知っているから、この類似性に基づいて「腹の虫」を「人」に喩えることができると考えられる。

3.2.4 〈度量があることは腹の幅が広いことである〉

- (13) 腹が太い/太っ腹、腹が大きい
- (14) 肚量大、宰相肚裏能撐船、以小人之心，度君子之腹、小肚鷄腸

(13) と (14) は「腹」のサイズ（或いは容積）を人の「度量」に結びつけるメタファー表現である。日中ともに、「腹が太い」、「宰相肚裏能撐船（宰相の腹に船を進めることができる→腹が太い）」というように、腹の幅が広いことは人の度量が広いことを表すのに対し、「腹がない」、「小肚鷄腸（人の腸は鷄の腸のように小さい→狭量である）」のように、腹の幅が小さいことは狭量であることを意味する。特に、「宰相肚裏能撐船」も、「以小人之心，度君子之腹（小人の心で君子の腹を推し量る→下衆の勘ぐり）」も、小人（心の卑しい人）の心が小さい、君子（品性の良い人）の腹が大きいというメトニミー的連想に基づいて生じたメタファー表現であるという点は中国語の特徴であると考えられる。

3.2.5 〈気立て・性質が悪いことは腹の中に有害なものがあることである〉

- (15) 腹が汚い、腹が黒い、腹が腐る
- (16) 肚裏有鬼、一肚子壞水、一肚子花花腸子

日本語でも中国語でも「腹・肚」の性質・状態は人の性格や気立てと対応づける。腹に有害なものが存在することが原因で腹が汚れたり腐ったり、性質が悪くなるという因果関係を読み取れる。これらの表現はこの因果関係に基づいて「気立て・性質が悪い」ことを表すと考えられるので、単なるメタファーではなく、メトニミー的基盤を持つメタファー表現である。この点が日中で共通している。一方、些細な相違点が見られる。「腹が黒い」、「腹が汚い」のように、日本語では腹の内部の状態を通して人の性格を捉えている。ここでは腹の内部の状態を内臓の状態に想定することが可能である。具体的にどんな内臓を捉えるかは明確に示されていない。

それに対し、中国語では、「肚裏有鬼（肚に鬼がある→心にたくらみがある）」、「一肚子壞水（肚に汚れた水がたまっている→心根が卑しい、陰険だ）」、「一肚子花花腸子（肚に性質の悪い腸がいっぱい→腹黒いたくらみがある）」を通して、人の腹にどんな内容物があるかを推測することによって人の性格や心の状態を捉えている。また、人の性格の悪さを表す類似表現には「黒心肝/心腸黒（心臓/肝/腸が黒い→腹が黒い）」があげられる。同じ概念（性格）を理解するには、「腹」だけでなく、「肝」や「腸」を含む慣用表現も使われている。興味深いのは、日本語では人の「心」の良し悪しを「腹（内臓）」の黒白で理解することである（腹黒⇔腹白）。中国語でも「心臓、肝、腸」の色（黒（=悪し・異常）⇔赤（=良し・正常））でこれらの内臓の状態を表すことによって人の性格や心の状態を捉えているが、日本語と違うところがある（e.g. 赤胆忠肝、赤血丹心（赤誠を尽くす））。

3.2.6 まとめ

日本語と中国語の「腹」を用いた慣用表現の中で、メタファー表現、メトニミー表現をそれぞれ取り上げて対照分析した。表でまとめると、以下の表1となる。表の「ソース」列はメタファー、メトニミーにおける〈腹〉の根源領域を表し、「ターゲット」列は目標領域を表す。表1をみると、日本語でも中国語でも「腹」が容器として捉えられており、容器の内容物を「感情」や「考え」などの「心」を表すものに対応づけている。一方、「腹」の内容物「知識・学問」、「腹の調子」に関して日中が異なることが見られる。

表1 「腹」の捉え方の日中比較¹⁰

		日本語	中国語	
〈腹は心を取める容器〉 概念メタファー	ソース			ターゲット
〈感情は腹の内容物〉	内部の膨大、 抑圧、充満	○	○	日本語：怒り、不満（腹が膨れる） 中国語：怒り、不満、苦しみ （一肚子火/気/苦水）
	腹の虫	○	×	怒り（腹の虫が収まらない）
〈知識・学問は腹の内容物〉	墨や書物	×	○	知識、学問（肚子裏有墨水、満腹詩書）
〈本心・考えは腹の内容物〉	容器の中身	○	○	本音（腹を探る、推心置腹）
	腹の虫	×	○	考え（肚裏蛔蟲）
	原稿	○	○	考え（腹を読む、打腹稿）
〈度量があることは腹の幅が広いこと〉	サイズ	○	○	度量（腹が太い、肚量大）
〈気立て・性質が悪いことは腹の中に有害なものがあること〉	汚れ、腐敗	○	○	陰険、たくらみ（腹が汚い、一肚子壞水）
メトニミー	身体感覚	○	○	笑い（腹を抱える、捧腹大笑）
	腹の調子	×	○	心配・不安（牽腸挂肚）

メトニミーとメタファーが協働する場合、メトニミー的基盤を持つメタファー表現もいくつか観察される。例えば、〈知識・学問は腹の内容物〉メタファーでは、「肚子裏有墨水」のように、中国の文化的背景（墨をつけて文章を書く）を受け、腹の内部にある「墨」が「知識・教養」を表すことによって、「知識や学問を持つ人」をメタファー的に表すことができると考えられる。また、腹の熱変化、腹の膨れる状態を通して人の感情変化を捉える表現も、身体感覚に基づくメトニミーの基盤を持っていると考えられる（e.g. 腹が膨れる、一肚子火）。また、メタファー表現には因果関係を表すメトニミーが関わる場合も観察される（e.g. 満腹詩書、腹が汚い）。一方、中国語では、腹の内部の広さに関わる慣用表現（e.g. 宰相肚裏能撐船）が、品質の良い人の腹の幅が広いというメトニミー連想に基づいている点は日本語と違う。

以上は日本語と中国語の「腹」のメタファー表現、メトニミー表現、メタフトニミーに関わる表現を分析した。後藤（2016）により、日本語の「腹」の捉え方は「肝」や「腸」の捉え方と部分

¹⁰ 3.2.6 節の表1と3.3.6 節の表2の作り方は後藤（2016：51）の表1を参照した。

的に重なり合うことで成立していると指摘されているが、中国語の方は異なり、「腹」と「肝・胆」はそれぞれ独立した概念として捉えられる（慣用表現では「腹」と「肝・胆」の互換性が見られない）¹¹。次の節では具体的に日本語の「きも」の表現、中国語の「肝」、「胆」の表現を取り上げて対照分析していく。

3.3 日本語と中国語の「肝・胆」

この節は、3.2 節と同じ手順で日本語の「きも」と、中国語の「肝」「胆」を用いた慣用表現を対照分析する。中国語では、「肝」は五臓の一つで、「謀慮」を司るものであり（「肝者、將軍之官、謀慮出焉（肝は將軍の官、深謀遠慮を出す所）」『素問・靈蘭秘典論』）、「意志」や「悲しみ」「怒り」といった感情を扱っている。「胆」は六腑の一つで、「決断」を司るものであり（「胆者、中正之官、決断出焉。（胆は中正の官、決断を出す所）」同上）、「中正」や「度胸」を象徴するものと考えられている。¹²両者は別物であるが、「肝」と「胆」が裏表（陰陽）関係を成し、補い合って機能している。¹³そのため、「肝・胆」を用いた慣用表現では、「肝」と「胆」はそれぞれ慣用表現を構成して感情を表す場合もあれば（e.g. 摧心剖肝（悲しみ）/心驚胆寒（恐怖））、合わさって感情や真心を表す場合もある（e.g. 肝胆欲裂（非常に悲しむ）、肝胆相照（真心を持って人に接する））。一方、日本語の「きも」は「肝」か「胆」に表記されることがあり、肝臓の意味を表す一方、内臓全体を表すこともできる。

中国語の実例を収集した上で、「肝」と「胆」が合わせて慣用的に使われる表現があり、日本語の「きも」と対照するため、以下、3.3.3 と 3.3.5 のラベルで「肝」と「胆」をあわせて〈きも〉と表記し、分析の際に両者を分けて分析することにする。

まず、「きも」のメタファー表現を見ていく。日本語と中国語の例を収集して検討した結果、〈きもは心を収める容器〉という容器としての「きも」の概念メタファーを立て、それぞれの下位メタファーを分析する。特に「胆」に関しては Yu (2003) による〈胆は勇気を収める容器〉を引用し、〈勇気は胆の内容物〉メタファーを立てて分析する。

3.3.1 〈悲しみ・怒り・驚きは肝の損傷〉

- (17) 肝をつぶす、肝を砕く、肝を抜かれる、肝が潰れる
- (18) 肝腸寸断、摧心剖肝、肝胆欲裂、肝胆俱裂、肝火旺

後藤 (2016 : 48) によれば、(17) の表現では、苦しみや驚きなど心の動揺が、「つぶす・くだく」などが表す損傷と関連付けられるという役割を担うのは「肝」と「腸」(e. g. 断腸の思い) である。中国語でも、極度の悲しみを表現する際に、「肝腸寸断（肝と腸が千切れる→断腸の思い）」、「摧心剖肝（心臓と肝臓を潰す→非常に悲しむ）」、「肝胆欲裂（肝と胆が引き裂かれる→非常に怒る、悲しむ）」といった表現が使われる。これらのメタファー表現は「誇張」という中国語の伝統的なレトリックを使い、「程度が非常に高い」ことを意味している（下記の(22)、(23)も同様）。(18) の表現をみると、「悲しみ」や「怒り」が収まらないことが肝の損傷が生じる原因になるという因果関係が読み取れる。こうしたメトニミー的基盤によってメタファー表現が成立する。

¹¹ 無論、中国語の「腹」は内臓（肝や胆）を収める体の部分であるため、「腹」の捉え方が「肝」「胆」の捉え方と重なり合う部分がありうる。

¹² 「肝者、將軍之官、謀慮出焉。胆者、中正之官、決断出焉。」の現代日本語訳は、「肝は知恵と勇気にたけた將軍にたとえられ、一切の計略や推測・考慮をするときに力を発揮します。胆の性格は公正で剛直で、正確な判断を下す能力を備えています。」である（石田訳、1991 : 164）。

¹³ 五臓は心、肝、脾、肺、腎というエネルギー（気）が詰まっている臓器である。六腑は胃、胆、膀胱、大腸、小腸、三焦という、中が空っぽとなっている器官である。人の身体は五臓を中心にして機能しており、六腑はその機能を補佐する役目を担うと考えられている（三浦、1996 : 57）。中国伝統医学の陰陽五行説では、五臓六腑は陰陽（裏表）関係にあり、一対の組となって協力し合っており、バランスを維持することによってはじめて健康が保たれる（三浦、1996 : 48）。人の生理活動だけでなく、精神的な作用にも重要な役割を果たしている。このうち、「木」の属性（生命の始まり、発展など）を有する一組は肝と胆である。肝（陰）が生命のエネルギーを維持する気血を貯蔵し流通させる役目を担う。胆（陽）が肝によって作られた胆汁の貯蔵と排泄を機能する。また、肝が精神と情緒の安定を保ち、胆が決断を下すことによって人の精神活動の安定が保たれる。中国語では、肝と胆は緊密な関係を持ち、感情や意志に関わるものと捉えられている。

これらのメタファー表現の意味の成り立ちに関しては、中国伝統医学の考え方が影響を与えていると窺える。「肝」は気血の貯蔵・疏泄を調節する臓器であり、「肝」の疏泄作用が失調すると、精神活動・生理活動の失調を招くことになる。人が憂うつや悲しみに浸っていると、肝気が溜まり、「肝気鬱結」となるので、肝臓と身体に悪影響を及ぼす。同様に、「肝火旺（肝火上炎）」は肝気が暴走する状態を表し、人が怒りやすいことを示唆する表現である。強い怒りによって肝気は流れが滞り、長期化すると熱を生じて肝火と化し、上逆して頭痛などの症状を起こすわけである。『素問・陰陽応象大論』にもよれば、「肝」は「在志為怒（肝は怒りを生じる）」、「怒傷肝（怒りは肝を傷つける）」とされている。つまり、「肝」の疏泄作用は人の情志の変化に影響し合っている。

また、「肝胆俱裂（肝と胆が引き裂けた→非常に驚き恐れる）」のように、中国語の「肝」表現も、「驚き」によって引き起こされた「肝」の損傷を表しているという点が日本語の「肝」表現と共通する。一方、中国語の「肝」表現が「悲しみ・怒り」に焦点を当てるのは相違点としてあげられる。

3.3.2 〈理解・記憶は肝に刻み込むこと〉、〈感動は肝にしみること〉（後藤，2016）

(19) 肝に銘じる、肝に染みる

(19) の表現は理解・記憶した内容を「肝」（または「腹」、e.g.腹に落ちる）に残されるものに喩えるものであり、感動が「肝」（または「腸」、e.g.腸にしみる）に浸透する様子に喩えるものである（後藤，2016：50）。いずれも中国語の「肝」表現にはない表現である。理解、記憶、感動を表すには「肝」ではなく、「心」や「肺腑」を用いる場合が多くある（e.g.刻骨銘心（心に刻む）、動人心弦（心の琴線に触れる）、感人肺腑（人の心に深い感動を与える））。

3.3.3 〈度胸があることはきもの幅が広いこと〉、〈勇氣は胆の内容物〉

(20) 肝っ玉が太い、肝が大きい/小さい、肝試し

(21) 胆大如斗、胆量大、胆大心細、胆大包天、胆小如鼠、肝胆過人

日本語でも中国語でも「きも」のサイズ（容積）を人の「度胸」や「胆量」に喩える容器のメタファー表現が多くみられる。日本語では、人に度胸があることを形容するには、腹が太い、腹がないといった「腹」の容器のメタファー表現も使われている。一方、中国語は「胆大如斗（胆斗の如し→非常に大胆だ）」、「胆大包天（胆は天より大きい→（多く悪事をする場合に）大胆極まる）」、「胆小如鼠（胆が鼠のように小さい→臆病）」のように、多くの場合は「胆」を用いて「胆量」の大きさによって「勇氣」の大きさを捉えている。「肝」「胆」がセットとなって勇氣を表す場合もある（e.g.肝胆過人（胆量が他人より優れている→勇氣がある））。Yu(2003)によれば、中国語の「胆」は中身が空っぽな容器で、「勇氣」が胆に収められている「氣」に当たるものである。このような捉え方の背後には〈勇氣を収める容器は胆〉、〈勇氣は胆にある氣〉という概念メタファーが働いていると考えられる。

3.3.4 〈驚き恐れは胆の損傷〉

(22) 碎心裂胆、心驚胆寒、心胆俱碎、肝胆俱裂、心隕胆破、聞風喪胆

(22) はすべて「きもが潰れて非常に怖がってぞっとする」を表す表現であり、文字通りの事態を誇張の修辞技法で描写し、「恐怖・驚き」の程度の高さを表している。前述したように、中国語の「胆」が勇氣、度胸に関わるものと考えられるので、「胆」が破れたり喪失されたりすることは勇氣を失うことに意味する（e.g.心胆俱碎、聞風喪胆）。これらの「胆」表現は動詞（碎く・驚く・引き裂く・破れる・喪失する）や形容詞（寒）を用いることで驚きや高い恐怖心を示している。また、「心驚胆寒」が「胆」の熱変化を通して人の心理状態の変化を捉えているので、こうした感情表現は体温変化に基づくメトニミーが「胆」のメタファー表現の基盤になると考えられる。この点については日本語の「心胆を寒からしむ」、「きもを冷やす」などの表現と共通している。

3.3.5 〈本心・真心はきも〉、〈意志・忠誠はきも〉

「きも」は「心」を収める容器ではなく、メトニミー的に拡張され、容器の内容物として働く場合もある(〈心はきも〉)。最後に、「きも」が「心」と対応づける表現を見ていきたい。

(23) 嘔心吐胆、吐肝露胆、挖心掏肝、披肝瀝胆、肝胆相照

中国語では、「心臓」「肝」「胆」という重要な内臓器官は「本心」や「真心」と対応づけるものと考えられている。「吐肝露胆」は肝と胆を口から吐くことによって本音を打ち明けすことを表す。「嘔心吐胆」は同じく文字通りに心臓と胆を懸命に吐き出すことを表すが、「心を尽くして苦勞する」という意味を表す。また、「挖心掏肝」は心臓と肝を深い所から掘り出すことで相手に自分の真心を示すことから、真心をもって人に接する意味を表す。「披肝瀝胆」も文字通りの意味(肝臓を開き、胆汁を垂らす)から、「腹を割って打ち明ける、真心をもって人に接する」と同じ意味を表す。

これらの表現では「本音を打ち明ける」や「心を尽くす」を表すには用いられた動詞が特徴的である。「嘔(吐き出す)」「挖・掏(抉り出す)」という動詞に「力を入れて懸命に取り出す」ことが含意されるので、こうした動詞を用いた表現は「心を尽くして懸命に物事をする」を表すことができる。また、「吐く・露出する・披(開く)・瀝(垂らす)」も「内部に隠れているものを明かす」ことを含意するので、「吐肝露胆」「披肝瀝胆」のような表現は相手に真心や本音を示すことを慣用的に意味すると考えられる。

「肝胆」という言葉は文字通りに肝と胆を指すものであるが、「肝胆相照(肝胆相照らす)」「肝胆過人(勇気がある)」のように、肝胆を複合語的に用いることで「誠の心」や「勇気」を慣用的に表すこともある。

次に、「きも」は「意志」や「決心」と対応づける場合もある。

- (24) きもをなめる/臥薪嘗胆、きも(腹)を決める、きも(腹)を据える
- (25) 臥薪嘗胆、忠肝義胆、赤胆忠心/肝

(24) では「きもをなめる」は中国語の成語「臥薪嘗胆」に由来した表現と考えられる。BCCWJで「きもをなめる」を調べた事例には、「薪の上に寝たり、胆を嘗めたりして、自分の身を苦しめ、復讐をはたすまで恨みを忘れずにいること。」(松宮光伸『酒は百毒の長』)がある。この文が描写する「臥薪嘗胆」の物語は、文字通りの意味「きもをなめる」から、「目的を達成するために苦心を重ねること」という慣用的意味を拡張させるメトニミー的基盤である。実際にきもをなめる行為を伴わなくても意味が生じ得るので、メトニミー由来のメタファーであると考えられる。また、「きもを決める」、「きも(腹)を据える」では実際に文字通りの事態が生じえないので、メタファーであるが、「きも」または「腹」を据えることによって精神の安定が保たれ、心を決めることができるので、メトニミーも関わっている。このメトニミーに基づいて「決心・覚悟する」を表すメタファー表現が成り立つと考えられる。

(25) では、3.3節で言及したように、肝は將軍で、胆は裁判官であると捉えられる。そのため、「忠肝義胆(忠節を守り正義を貫こうとする決意)」、「赤胆忠心(非常に忠実である)」のような人を形容する表現は肝と胆の属性(忠誠、正義)を通して人の性格や決意を捉えることができるのである。また、これらの表現の対義表現があげられる。例えば、「黒心肝(心臓と肝が黒い→腹が黒い)」という慣用表現は、「肝が黒い=性質が悪い」という考え方にに基づき、メタファーによって人の性格・性分の悪さを捉えているものである。

3.3.6 まとめ

以上は日本語の「きも」と中国語の「肝」「胆」の表現をメタファー、メトニミー、メタフトニミーの観点から分析してきた。日本語では「容器」としての「きも」は外界から受けた理解、記憶、感動を収めるものであり(e.g.肝に銘じる)、激しい感情が起こると「きも」に損傷が生じるので、「精神」の安定が「きも」の安定につながっていると考えられる(e.g.肝を潰す)。一方、中国

語では、中国伝統医学からの影響を受け、「肝」が「感情（特に怒り）」を扱い、「胆」が「勇気」「正義」を扱うものであり、「肝胆」が「本心」や「真心」を表すこともできる。「肝」と「胆」の働きが正常に行われると、精神の安定を保つことができる（e.g.肝胆俱裂、碎心裂胆）。具体的には、日本語の「きも」と中国語の「肝」「胆」の捉え方の共通点と相違点を以下表2にまとめた。

表2では、ソース「損傷」において中国語の「肝」と「胆」の所につけた「△」は、慣用表現の中でその語が単独では用いられず「肝」と「胆」の組み合わせの中で用いられるという意味を表している（e.g.肝胆欲裂、肝胆俱裂）。

表2 「きも」、「肝」「胆」の捉え方の日中比較

		日本語 きも	中国語 肝	中国語 胆	
〈きもは心を収める容器〉 概念メタファー	ソース				ターゲット
	銘記、浸透	○	×	×	理解、記憶、感動（きもに銘じる/しみる）
	損傷	○	○	△	悲しみ、怒り（肝を砕く、摧心割肝、肝胆欲裂）
		○	△	○	驚き、恐れ（きもを潰す、心驚胆寒、肝胆俱裂）
サイズ	○	×	○	度胸（きも（腹）が太い、胆大如斗）	
〈心はきも〉メタファー	露出、照応	×	○	○	本心、真心（吐肝露胆、肝胆相照）
	固定	○	×	×	決意（きもを決める、きも（腹）を据える）
	属性（忠誠、正義）	×	○	○	性格、決意（忠肝義胆、赤胆忠心）

また、メタフトニミーの観点からみると、3.3.1節〈悲しみ・怒り・驚きは肝の損傷〉では「肝を潰す」、「肝胆欲裂」のような「人の精神の不安定」を捉える表現は、精神の不安定（悲しみや怒り）が肝の損傷の原因になるとメトニミー的に捉えられるので、純粋なメタファーではないと考え得る。このメトニミーがメタファーの前提となるのでメトニミー由来のメタファーであると考えられる。一方、「臥薪嘗胆」のような、物語が文化的基盤として働いている表現にもメタファーとメトニミーが協働して動機付けていると考えられる。

4. 考察

以上、現代日本語と現代中国語において、精神概念を表す「腹」、「肝」、「胆」を用いた慣用表現を通じて、それらの身体部位の捉え方を対照分析してきた。主にメタファーとメトニミーの観点から分析したが、メタファー表現にはメトニミーも関わっている場合が多くある（メタフトニミー）ことが観察される（e.g.腹が張る/一肚子火、きもを潰す、肝胆欲裂）。メタフトニミーによる慣用表現の意味の成り立ちには、身体基盤（身体感覚に関する経験など）や文化的基盤（文化的知識、中国伝統医学の考え方など）が重要な役割を果たしていると考えられる（e.g.「肝」と「胆」の役割や機能）。

さて、日中両言語の「腹」の認知モデルを比較してみると、日本語でも中国語でも「腹」の捉え方に共通点が多くみられる。いずれの言語でも「腹」は内臓を収める「容器」で、身体の重要な地位を占めており、精神上で感情、性格、本音など幅広い「心」の側面と対応している。「腹」は感情（怒り）、本心・考えを収めている容器であり、「腹」のサイズや「腹」の内容物によって人の度量や性格の良し悪しが表される。また、腹筋の緊張・弛緩が笑いの感情を引き起こすことに基づく経験が「腹」のメトニミー表現（e.g.腹を抱える、捧腹大笑）を支えていると考えられる。

一方、中国語では「満腹詩書」「一肚子墨水」などの慣用表現が示したように、「腹」に墨や書物という「知識」に関わるものがあるかどうかによって、学識の豊富さが違ってくる。この点は中国語の「腹」の捉え方の特徴であると言える。

「きも」の認知モデルに関しては、「肝」という容器は外界からの刺激による損傷を通じて悲しみ、苦しみ、驚きといった感情を表している点が日中で共通している。これは「肝」が「精神」の安定を維持する役目を担っているという考え方が共通するからであると考えられる。一方、中国語では、日本語と異なり、「悲しみ・怒り」を表現するには「肝」の表現が使われ、「驚き・恐怖」を表すには「胆」の表現が使われている。これは「肝」が「怒り」を生じるもので（肝在志為怒）、「胆」が「決断」を司るものである（胆者決断出焉）という中国伝統医学の考え方が影響を与えていると窺える。また、「肝」「胆」を吐いたり掘り出したりすることで相手に真心を示すことも中国語の特徴である（e.g.吐肝露胆、挖心掏肝）。

日本語の「肝に銘じる/しみる」のように、理解、記憶、感動が「肝」に残されるものという捉え方は中国語にはあまり見られない。それに対し、中国語は「心」や「肺腑」を用いて理解や感動を表す表現が多用される（e.g.刻骨銘心、感人肺腑）。

最後に「腹」と「肝・胆」の捉え方については日中両言語の相違点を検討する。後藤（2016）によると、「腹」の認知モデルは「肝」の認知モデルと重なり合っている部分（e.g.腹/肝の安定が心の安定と対応し、腹/肝のサイズが心の強さと対応する）がありながら、独自の特徴（e.g.肝の損傷を通じて怒りなどの感情を表す）を有していると指摘されている。「腹」という概念は臓器を内包する容器として捉えられるので、「腹」に対する理解は「内臓」に対する理解と関わり合っている可能性がある。また、「きも」「腹」という語の指示対象は多岐にわたり、両方ともに「内臓」を指すことがあるので、「腹」と「きも」に対する認知の境界線が明瞭ではないと言えるだろう。これは「腹」が内臓を収める身体の重要な部分であり、内臓に対する認識との重なりを通して認識されているからであると考え得る。

一方、中国語では、「腹」と「肝」「胆」の指示対象が明示的であり、それぞれ「内臓を収める」身体部位、身体器官（肝臓と胆）として明確に意識されている。身体の各部位・器官は各自の役割や機能を果たし、他の身体器官と協働することによって身体と精神の健康を維持していると考えられている。「腹」表現と「肝」「胆」表現の互換性が見られないように、「腹」はあくまで「心」を収める「容器」の役割を果たしており、その容器の中身である感情、本心、意志という「心」の側面と緊密に結びつけるのは「肝」や「胆」であると考えられる。無論、「腹」には、「容器」の内容物（墨、有害なもの）「容器」のサイズを通して人の知識の豊たかさ、人の性格や心の状態を理解するという独自の特徴を有している。

5. おわりに

本稿は認知言語学の観点から日本語と中国語における「腹」「肝」「胆」を用いた慣用表現を検討することで、「容器」のメタファーを中心に、それぞれの身体部位・器官の認知モデルを対照分析して共通点と相違点を考察した。日本語と中国語は「腹」の捉え方に共通点が多く見られるが、「腹」の内容物に対する理解において日中両言語の相違点が観察される。「きも」の認知モデルに関しては、日本語と中国語は「肝」の損傷によって感情を捉えることが共通しているが、具体的にどんな感情が捉えられるかは「きも」「肝」「胆」の役割によって異なってくる。また、日本語と中国語の「きも」の認知モデルの比較において、中国語の「肝」「胆」の認知モデルの形成に中国伝統医学からの影響があるということは大きな違いとなる。この点については、中国伝統医学では「心臓」が五臓の主としてあらゆる精神活動を司るものと考えられているので、「心臓」は身体の基本的な単位として認識されており、「肝」「胆」「腸」といった内臓の認知モデルと重なり合うことによって成立する可能性があるという仮説を立て、詳しい分析・考察を今後の課題とした。

参考文献

- Goossens, L. (1995). Metaphonymy: The interaction of metaphor and metonymy in figurative expressions for linguistic action. In Goossens L, Pauwels P, Rudzka-Ostyn B, Simon-Vandenberg A, Vanparyset J (Eds.), *By Words of Mouth: Metaphor, Metonymy and Linguistic Action in a Cognitive Perspective* (pp.159-174). John Benjamins.
- Kövecses, Z. (2000). *Metaphor and Emotion: Language, Culture, and Body in Human Feeling*. Cambridge University Press.
- Lakoff, G. and Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press. (邦訳: 渡部昇一・下谷和幸 (1986) 『レトリックと人生』大修館書店)
- Laokoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press. (邦訳: 池上嘉彦・河上誓作他 (1993) 『認知意味論 一言語から見た人間の心』紀伊國屋書店)
- Yu, N. (2003). Metaphor, body, and culture: the Chinese understanding of gallbladder and courage. In *Metaphor and Symbol* 18 (1) (pp.13-31). Routledge.

Yu, N. (2008). The Chinese heart as the central faculty of cognition. In Sharifian F, Driven R, Yu N, Niemeier S (Eds.), *Culture, Body, and Language: Conceptualizations of Internal Body Organs Across Cultures and Languages* (pp.131-168). Mouton de Gruyter.

後藤秀貴 (2016) 『腹』の比喩表現と認知モデル再考：『きも』, 『はらわた』, 『ふ』との接点『言語文化共同研究プロジェクト』, pp.45-56, 大阪大学言語文化研究科.

——— (2019) 「精神の座としての<腹>：身体部位詞の通時的観察と認知言語学的分析」『言語文化共同研究プロジェクト』, pp.23-35, 大阪大学言語文化研究科.

松井真人 (2007) 「メタファーの経験的基盤に関する一考察 — 『心』の存在場所に関する日英語のメタファーをめぐる一」『山形県立米沢女子短期大学紀要論文』 42, pp.37-44, 山形県立米沢女子短期大学.

三浦於兔 (1996) 『東洋医学を知っていますか』新潮社.

データソース

『現代語訳 黄帝内経素問』(南京中医学院医経教研組編、石田秀実訳) 東洋学術出版社, 1991.

『現代漢語詞典』(第七版) 北京商務印書館

『新唐書』(宋・歐陽修(撰)) 北京商務印書館, 1958.

『中国成語大辞典』上海辞書出版社

『中日大辞典』(増訂第二版) 大修館書店

『中国語辞典』白水社

『日本国語大辞典』(第二版) 小学館

コーパス

現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)

謝辞

本稿の作成にあたり、大阪大学人文学研究科の大森文子教授、王周明教授より丁寧なご指導、有益なご助言・ご指摘をいただきました。心よりお礼を申し上げます。ネイティブチェックしてくださった大学院生の篠崎秀紀さんにも感謝いたします。なお、本稿の不備や不足はすべて筆者に帰するものです。